

花橋

別れと出会い

発行日

令和5年12月15日

第10号

発行・編集

三崎高校総務課

スクールライフアドバイザー 清家信孝

父親の転勤に伴って、小学校で二度の転校を余儀なくされた。小二での同級生たちとの別れは、まだ幼かったのだろう、寂しさなどなかったように思う。慣れない土地での小三からの学校生活ではかなりキツいじめにも遭った。強さもあつたのだろう。負けなかった。そのいじめっ子とは今も折々に便りを交換する仲である。二校目の仲間たちとは小五の終わりで別れることになる。その時は悲しかった。車の窓から泣きながらいつまでも手を振って別れた。何やら歌の文句みたいだ。小六からの新しい仲間、皮肉にも元の学校のメンバーだった。小二で別れた彼らとの四年ぶりの対面は「浦島太郎」のタイムスリップそのもので、奇妙な付き合いがしばらくは続くことになる。

縁あって二つの学校の友人たちとは今もつながっていて、それぞれの友人をつなぐ役割も担った。性別を超えての“仲人”である。

十数年前、少し疎遠になったそれぞれの学校の二人に連絡を取って絆を確かめ、三人でのやりとりが始まった。縁とは不思議なもので「あなたがいなかったら……」と双方から感謝された。ずっと交友を楽しめるはずだったが、幼馴染のほうの一人が乳癌に冒され、八年にわたる気丈な闘病の末、亡くなった。去年のことである。家族葬ではあつたが、どうしても最後の別れに立ち会いたく、友人として告別式に臨んだ。無性に悲しかった。親との別れもつらかったが、親には悪いがそれ以上の悲しみに襲われた。親が先に逝くのは仕方ない。それなりの覚悟あつての別れである。実は弟も事故で亡くしている。親より先に逝ったから「逆縁」である。親しい同級生との別れも半ば逆縁に近い。「時代」という時間を共に歩んだ仲間を失うのはやはり辛い。やじるべえがバランスを失うような危うさだ。

自身、いい歳(七十一歳)になった。お互いに別れを迎えても仕方ない歳になりつつあるが、近く遠く今も頑張つて生きている仲間たちがいる。

負けられない。今、生きている意味を自身に問いつつ、もう一頑張り、二頑張り……。

若い皆さんにも、学校生活のみならず、これから数々のかけがえのない「出会い」が待っているはずだ。少々の苦難に負けることなく、新たな扉を自力でこじ開け、仲間や生きがいを見つけていってほしい。

「元氣玉」としてこの一文を送る。

クラスマッチ

12月12日(火)に2学期のクラスマッチが行われました。午前と午後に分かれてサッカーとバスケットボールを行い、どのクラスも優勝を目指して懸命にプレーしていました。小雨がパラパラと降っている中でしたが、応援にも力が入っていました。午後からはスペシャルゲストとして愛媛FCでコーチを勤める羽田敬介さんにお越しいただきました。生徒のプレーを見ながら多くの貴重なお話をしていただきました。最後には優勝チームと先生チームのエキシビジョンマッチも行われ、大変盛り上がりました。

<クラスマッチの結果>

男子バスケットボールの部優勝	32R
女子バスケットボールの部優勝	31R
男子サッカーの部優勝	21R
女子サッカーの部優勝	22R
チームワーク賞	21R
MVP	22R 原朋之介 31R 山下遥奈



